

2030 型セルフラーニング

「教えない授業Ⅱ 学習スタンダード」(教師用) 2026. 4

講師 西留中雄先生

日本の教育は変わる!!

先生ではなく、生徒が創る授業

日本の学校がこれから面白い始める!

1つ: 未来像を作る! 2つ: パフォーマンス評価

自分の時代は、過去のふりかえりから、だから、授業の古い決まりから、そろそろ変わるべきでは?

教師はサポート役、リファインダー

これからはこうあるべきだ。だから、長沢中は特別な事はしていない!

「反対する人」もいる。先生が教える事は当たり前、学力が伸びない!

先生達が考え方を 変える必要があるのでは??

テストだけでなく パフォーマンス評価 も成績に入れるべき!!

先生達の中で 共有 をしっかりするべき!!

先生達のネットワーク、先生達の研究、コミュニケーション

①とある音楽の授業で、ホワイトボードを使った **全員参加型** の授業だった。

②とある学校の体育の授業で、言記述、Eコマ、パソコンを使い、授業も担任以外の教科係 etc. ちょっと話し合いをする事が **大切** になってくる

まとめ

①日本は、生徒主体となり、先生がサポート役になるという事へ向か、っていくべきである。

→ 先生達が考え方を 変えていく必要がある!!

→ 「全員参加型」で、話し合いが活発な授業、ついに 目指すべき授業 が実現できる 参加者の感想

子どもたちの授業への願い（参観に来た先生方への歓迎のメッセージ（生徒）（備品 247）

1年A組 I（長沢中）

「研究授業って誰のためのものでしょう。勿論、先生方のためでもあると思います。でも、勝手に研究されることは、私はすごく嫌です。小学生の頃、何でこんなことやんなくてはならないんだとずっと思っていました。だから私の中学校のように、生徒自身のためにもなる研究授業の方がよいと思います。

今回は生徒が創る授業です。自分たちで話し合うところをどうぞご覧ください。いつも実行委員が中心になり動いていますが、今回は班長、道徳係もファシリテーターの役割をします。これまで班長やリーダーとしての動き方の打ち合わせをしてきました。通常は実行委員が中心となりやっていることを班長や道徳係も行うように計画しました。実行委員が見本を示し、班長が実際授業の中でも動ける練習をしました。だから班長も自分毎のように伝えられるようになっています。道徳委員だけでなく実行委員も班長も動く力をつけています。実際、自分もスマートレッスン（教師がいるセルフ授業）をして、①周りを見る力②相手の意見を取り入れる力など受け入れる力が身に付きました。それにこんな考え方もあるんだということも知りました。Aさんはどうですか。

A「私の考えるスマートレッスンのメリットとしては、先生方がいない分、自分たちで課題や問いの解決が出来ます。ですがデメリットもあります。先生たちがいない分、自分たちで進めることはとても大変なことです。小学生の頃は、生徒たちが授業を進めてくれたので考えようとしませんでした。今は、授業を進めることは、とても大変なことだと実感しましたが満足感もあります。」 今日、各県からいらっしゃった先生たちは学習や学びとはどのようなこととお考えでしょうか。私はこれまで学習とは、受験のため知識を身に付けるためのものと思っていました。勿論、今まで通り先生に教えてもらえるような授業をやってもらいたいという人や、Aさんのように自分たちで授業を回すのは大変だなと思う人もいます。ですが、実行委員としてやってみて気付いたこと、Aさんのように自分で意見を考え考察するのが楽しいということ等でこれこそ学びであると考えようになりました。知識としての学びや、受験や夢、仕事につくために必要な学びもあります。ですが、それ以外にも大切な学びというものがあると思います。この学び「スマートレッスン（先生のいるセルフ授業）」で身に付けることが出来ます。全員に広がっていくと、みんなが学ぶことの大切や楽しさに気付いて動けるようになれば、よりよい学校づくりに必ずつながると考えます。学力とは、勉強が出来るだけではない。学びとは何なのか、学びとは楽しいものと感じてもらえると嬉しいです。ありがとうございました。」 -2-

主体的な学び これからは教師も

改めでだが、現在の学習指導要領は、日々の授業を「主体的・対話的で深い学び」としている。2030年には、「個別最適な学び」「協働的な学び」がキーワードとなる。2回の指導要領の改訂を見ても、「学び」が前面に出ている。

1 「学び（学び方）」の開発がまだ道途上

教師が「どのように教えているか」から離れていない面がある。教科教育を深めることにまだまだ走り過ぎており、子どもの学びの中での活躍が見えない。教師にとって自分で学んできた教科を極めようとする意識が強く、「教科書」を教えることが中心となる。子どもたちの「学び（学び方）」の開発がまだ道途上である。1965年にカナダは、従来の受動的で退屈な教師の講義形式を止めたそうだ。だが、私たちの周りでは一斉授業型の教科教育がまだまだ強いあとを感じている。教師の学ぶ姿勢が子どもの姿に出ており心配である。

2 「教師は学び続ける」ことが期待

①教師が子どもたちへの重要なローモデル

教師の学ぶ姿勢（新たな教育の方向性を模索）が子どもたちに影響をする。教師の学ぶ姿勢を見せたい。

②変化に合わせた（合わせられる）教師

時代が変化していることに気付く。ICTの進化もあり教育現場も複雑に多様化している。その中でも、ゆとりをもてるようにコンパクトな学校（自分）を創る。

③「学び方」の継続的向上

「教科の専門性を身に付けること」時は必要だが、今日では、「学び方」の知識とそのための技術を身に付ける必要がある。

④学習指導要領の「学び方」の育成は継続

学習指導要領の改訂がある。だが、変わらない言葉は、「学び方」だ。文部科学省は、現新学習指導要領で2回に渡り「学び方」の育成を図ると考えられる。現行学習指導要領の再徹底であろう。

学習指導要領は、「学び方（授業内）」の継続

現学習指導要領（授業内）	2030 学習指導要領（授業内）
主体的＝教師を頼らず学ぶ 対話的＝少人数、グループ学び、全体の組み合わせ 深い学び＝発展的（深く考える）な問題に挑戦する	個別＝一人学びか仲間を募り学ぶかを 選択 最適＝学ぶ方法の選択（ICTの活用、考察方法の 選択 ） 協働的な 学び ＝異学年他学級で学ぶかを 選択

3 子どもたちの学びを意識して、自分の授業を見る

まず自分の授業の実態をしっかり見つめるとよい。「学び方」は、教師を頼らず個別で学んでいけるかどうかを確かめる。出来ていなかったら原因を分析し、「子どもが主体的な学び方」の授業改善に挑戦していく。その際、教師同士の協働性を高める中で、自らも「主体的」に学ぶようにする。

4 主体的な学び これからは教師も

教師の主体的な学びはこれから自分の「内」にあると思う。まず、研修が面白いと感じることが重要だ。教科教育の研修しか続けられない狭い自分をつくってはならない。そのためには、教師自身が授業の課題について学び、他の教師と学び合うとよい。教師の協働性を高めること必要がある。その際、重要なことは、いわゆる教科や教師間の「教科の壁」「学級の壁」を取り払うことだ。その上で、子どもの学ぶ視点で教師同士が授業を見合う。子どもたちが授業で変わってきたという良い認識が高めるまで研修をしていく。

「2030型セルフラーニング」は、「西留安雄の教育実践」のブログで公開する。それをテキストにして子ども主体の「学び方」を校内に根付かせていただきたい。

2030 型セルフラーニング（教えない学習スタンダードⅡ）の開始

現行学習指導要領「主体的・対話的で深い学び（方）」と次期学習指導要領「個別最適で協働的な学び（方）」の共通点は、「学び（方）」である。この2つの学習指導要領は違うものではなく、連続性があると思う。全教科領域で子どもの「学び（方）」を身に付けさせる必要がある。

それを形にしたのが「2030 型セルフラーニング」だ。全国の学校をまわり貴重な資料を整えたテキストである。特に椿小、御津中、長沢中、木津中、越知小、三原小中には感謝したい。全国でこの資料をもとに子どもの「学び（方）」の育成を図っていただきたいと願う。

現在（2026.4）の時点で具体的に使えるものをご用意した。今後、個別最適で協働的な学び方の方法が開発されると思う。私は、「選択」と「子どもが主語」という言葉がキーワードになると考える。

このテキストは、教師用に授業備品で書いたことを集約したもので子ども用には書いていない。子どもが「主語」の授業であれば、子ども用があってもよいはずだ。私たちは、そのことを気付かず教師だけで授業の仕組みを決めてきた。この改革が最初に行わなければならないと思う。

さて、「2030 型セルフラーニング」のテキストの開始。永年、取り組まれてきた方は、一部の授業改革で済むと思う。理解もできるだろう。だが、始めて取り組む教師には難しいと思われる。そこで、まず、学習スタンダードで作成したテキストの年度に注目し、理解できるところから始めていただきたい。約 20 年の歴史をもつ学習スタンダードだからだ。

- | | |
|---|---|
| 0 | ～2008 版 プロフェッショナルティチャーズノート～（東村山大岱小） |
| 1 | 2019 版学習過程スタンダード 38 * 学び方の詳細段階 38 |
| 2 | 2021 進化型 smile 授業スタンダード 32 * 見通し、振り返りの学びの段階を追加 |
| 3 | 2024 未来リレー型学習スタンダード * 自力解決から振り返りまでの解決活動の自由化 |
| 4 | 2026 2030 型用セルフラーニング * 学習課題選択、学び方の選択、異学年の学び、学習評価会 |

1 取り組む年度の違い

2021 進化型 smile 授業スタンダード 32 と 2024 未来リレー型学習スタンダードは、「西留安雄の授業実践」から取り出し、まずは学習段階を教師も子どもも身に付けていただきたい。これまで取り組んでいた学校は、2026.4 からの「セルフラーニング」に取り組まれるとよい。なお、学習スタンダードは形式的であるという誤解があるので、今回から「2030 型セルフラーニング」に名称を変えてみた。

2 「セルフラーニング」の内容

1 章授業の実際 2 章「主体的」とは、（再度、問う） 3 章学習スタンダードの原点（備品 275） 4 章セルフ授業（子ども全員活躍型）とは 5 章 2030 型セルフラーニングの開始 6 章子ども研究会・教師の校内研修会 7 章セルフラーニング学習活動案 8 章研究冊子は、子どもと教師の合作 9 章子ども学力向上プロジェクト等で構成している。

1 章から 4 章までは、学習スタンダードを基にしてきた基本的な学びの理由を述べている。5 章から 9 章は、これから取り組む内容となるので、ここから学ばれるとよい。

3 「主体的な学び」には学習リーダーが必要

全国の多くの授業を見た。その中で「主体的」について考えさせられた。教師が授業の先導をする（よくしゃべる）と教科書の内容はこなせるが、子どもたちは受け身になり一過性の知識しか身に付かない。

そこで「対話的な学び」「協働的な学び」が出てきたと思われる。それを行うのは、子どもたち各々とらえるだろう。各々では具体的な動きは出来ない。そこで私たちは、「学習リーダー」が進行する授業を行ってきた。部活動のキャプテンに置き換えられる。学習リーダーがいる、いないは授業の高みにも影響する。第 4 章に「学習リーダー」については記述してあるので熟読していただきたい。

授業改革は、管理職の「熱意」にかかっている。まずは、管理職が先に熟読して取り組まれるとよい。